

青年期女子における自己関係づけに関する研究

— 自己関係づけの類型化とTATによる質的アプローチ —

森 み な み

問題と目的

自己関係づけとは、他者の何気ない仕草や行動が自分に向けられたものであると感じ、自分に関係づけて被害的に判断する傾向と定義されている(金子, 2000)。こうした自己関係づけを扱う先行研究のほとんどは自己関係づけ尺度(金子, 2000)を用いた量的研究であるが、何れの研究も自己関係づけの抽出力に課題を抱えていると言える。

例えば、既存の自己関係づけ尺度では、「いつも一緒にいる友人から誘わなかったとき、自分は嫌われているのではないかと思う」という項目が、“どの程度当てはまるか”の5件法で測定されており、何を基準に“当てはまる”とするかが回答者間で異なることが予想される。こうした測定のばらつきを抑えるためにも、本研究では、自己関係づけをより多角的に測定し類型化を図ることで、自己関係づけ体験を従来よりも詳細に捉えることを第1の目的とする。

一方、自己関係づけは、自動思考すなわち自分の意思とは関係なく意識に上がるものの一つに数えられているため(大野, 2003)、自己関係づけそのものを尺度によって抽出することは困難であると言える。本研究では抽出の際、自己関係づけが女性同士の友人関係において生じやすい(金子, 2000)ことを踏まえ、女性同士の葛藤に対する通常は意識され得ない現実的で具体的な態度を反映しやすいTATのカード9GF[2人の女性の葛藤を思わせる場面が描かれたもの](安香・藤田, 1997)を用いることで、自己関係づけの各類型に特徴的な関係の認知すなわち“他者を自分にどう関係づけるのか”について検討する。また、自己関係づけは抑うつ等、不適応に繋がりやすい変数との関連が指摘されている一方で(金子・本城・高村, 2003)、青年期において体験されやすい青年期心性とも言われている(金子, 2000)。このことから、自己関係づけが生じた後の対処がその後の心の状態を左右する可能性は高く、TATでは物語の構成面に葛藤への対処の仕方を反映しやすい

(若本, 2004)とされている。そのため、本研究では自己関係づけの各類型に特徴的な関係の認知に加え、葛藤への対処についても検討することを第2の目的とする。

方法

2012年8月、心理臨床相談センターにて、質問紙調査と面接調査を実施した。自己関係づけの体験率が最も高いのが青年期女子であることや、TATがもつ侵襲性に配慮し、調査は臨床心理学専攻の女子大学院生14名に対して行った。

質問紙調査 第1の目的に対応し、「自己関係づけ尺度(金子, 2000)」は項目のみを使用し、測定方法として「妄想的観念多次元尺度(森本, 2005)」を援用することで、自己関係づけ体験を計7次元(頻度・抵抗感・違和感・確信度・訂正不能性・中断不能性・証拠探し)から測定した。

面接調査 第2の目的に対応し、TAT物語の作成を求めた後、物語の主人公に語り手の自己が投射されやすい(赤塚, 2008)ことを踏まえ、主人公を確認後、その主人公からみた自分と他の人物との関係【主人公(木の上の人)は他の人物(走る人と導入人物)のことをどう思っているか、主人公(木の上の人)は他の人物(走る人と導入人物)からどう思われていると感じているか】を問う追加質問を実施し、これらへの回答を関係の認知の分析対象とした。一方、葛藤への対処については、物語の構成面や追加質問への回答といった調査全体への取り組み方をもとに分析した。

結果と考察

自己関係づけの類型化

第1の目的に対応し、計7次元(頻度、抵抗感、違和感、確信度、訂正不能性、中断不能性、証拠探し)から測定した自己関係づけ体験をWard法によるクラスタ分析にて3群(I群3名、II群5名、III群5名)に分類し、各群の特徴を探るために、一元配置の分散分析を実施した。その結果、群間

に有意差がみられたのは「抵抗感」、「違和感」、「中断不能性」の3次元のみであった。これは、自己関係づけ(被害観念)には当3次元が関係するとした先行研究(森本・丹野, 2004)と一致する結果であった。次に、3群間の比較のためにTukeyのHSD法にて多重比較を行った結果、「抵抗感」、「違和感」は共に、Ⅲ群がⅠ、Ⅱ群に比して、「中断不能性」はⅡ、Ⅲ群がⅠ群に比してそれぞれ有意に高いことが示された。これにより、本研究では、Ⅰ群を「苦悩-中断不能感両低群」、Ⅱ群を「低苦悩-高中断不能感群」、Ⅲ群を「苦悩-中断不能感両高群」と命名した。

TAT反応にみる各類型の関係の認知と対処

第2の目的に対応し、第1の目的で明らかとなった自己関係づけの各類型にみられるTATの関係の認知と葛藤への対処について検討した。

苦悩-中断不能感両低群(3名) 当群に共通してみられた関係の認知の特徴は、【主人公(木の上の人)は、走る人のことをどう思っているか】への回答が「(走る人が自分を)頼ってくれているから、妹みたいな人」や「みんなが迷惑してる人」というように、その内容が主人公単独の思いではなく、他者に帰属されていた点であった。この点から、受け入れがたい自分の感情を他者に外在化する(馬場, 2000)投影や投影同一視が生じている可能性が考えられる。一方、物語の構成を見ても、当群の物語は、片口(1987)が述べる作話結合反応や作話反応に近い展開をみせていた。「(主人公と走る人が)昔から一緒に遊んでいたから、今男の人に会いに行っている」といった非論理的な内容や、「走る人は自分が一番になりたいと思う気持ちをとても持っている」という形で走る人を終始一貫してこき下すといったところがこれに当たり、本来2女性間の葛藤が語られやすいといったカードの特徴があるにも関わらず、当群の物語はカードとの整合性が損なわれていた。こうしたところから、当群の調査時における心的機能の低さが窺われ、先の関係の認知と併せてみても、当群は女性友人との葛藤に際し、原始的防衛機制すなわち投影同一視や分裂と思しきものをを用いることで葛藤を否認するといった特徴をもつことが推察される。

低苦悩-高中断不能感群(5名) 当群に共通してみられた関係の認知は、【主人公(木の上の人)は走る人からどう思われていると感じているか】に対して「自分に対する怒りがすごいんだろうな」

といったネガティブな内容が語られたが、そこには「主人公が走る女ものを壊して」という走る女が怒るに足る理由が存在し、この点から合理化が推測された。物語の構成を見ても、当群は走る人を友人以外の人物と設定し、その人物との葛藤を物語った。「友達ではなく、ただの働いている仲間」といった言及などがこれに当たる。この点から、当群は葛藤場面と思しき内容を認知するも、合理化することで、女性友人との葛藤を回避するといった特徴をもつことが推測される。

苦悩-中断不能感両高群(5名) 当群に共通してみられた関係の認知は、例えば【(主人公は)走る人のことをどう思っているか】において「勉強もスポーツもできて羨ましくもあり、憎らしくもある」という形で明細化されていた。物語の構成を見ても2女性を友人と設定し、「今までみたい深い話はできないけれど、一緒にご飯食べに行くくらいはすると思う」といった妥協を踏まえた結末がみられた。この点から、葛藤に対する耐性の高さが窺われ、これは女性友人との葛藤に対する当群にみられやすい態度であると推測される。

総合考察

各群にみられたTATの特徴から、まず、苦悩-中断不能感両低群は、自己関係づけに対する苦悩や中断不能感を抱きにくいというよりは、カードに示された女性同士の葛藤に圧倒されてしまう心的機能の脆弱さと関連して自覚されなかったものと思われる。次に、低苦悩-高中断不能感群は、2女性の葛藤を認知しても、合理化することで回避するために、苦悩を抱きにくく、葛藤の回避は中断不能感の高さに由来したとみることができる。最後に、苦悩-中断不能感両高群は、葛藤への耐性が高さ故に、自分の気持ちを他者から分離する形で自覚することができ、それ故に苦悩や中断不能感が自覚され得たものと思われる。

以上、認知-対処というプロセスで類型に一定の関連が示されたことは、青年期女子の同性友人との葛藤の理解に寄与するといった意義をもつものと思われる。

その一方で、本研究における類型は少ない対象者内での相対的なものであり、TAT反応も様々な要因を含んでいる。そのため自己関係づけの類型とTAT反応が一对一对応とは言い切れず、再考の余地を残すこととなった。